

パンデミック少年（とか）

2023/9/30（書き直し），2024/3(少し訂正)

目 次

第 1 章	パンデミック少年	5
第 2 章	レディーゴディバ	9
第 3 章	裸（？）の王様	13
3.1	まあ、普通のストーリー	13
3.2	賢い王様	16
3.3	不良商人	18
第 4 章	鏡映の犬，肉を放す	21

第1章 パンデミック少年

初夏の幸せな昼寝から目を覚ましたとき、神父様の村は、もはや何時もの眠くなるような日常を失っていたのです。村人は、手に手に武器（になりそうなもの）を持ち、険悪な顔で走って行きます。男連中だけでなく、勇ましいおばさん連中もパン捏ね棒を手に家から飛び出して来るのですが、気の早い婆さんや女の子は、もう家の前で泣いています。大変な騒ぎです。

遠くから、銃声が聞こえます。山の麓のこの小さな村には、銃（いわゆる火縄銃です）は一挺しか無いのですが、それを撃っているのでしょうか。でも、鉛玉もあまりないはずです。

神父様は、なにが起きているのか、すぐに分かりました。狼の群れが、羊を襲っているのです。神父様の、いえ、教会の羊も、無事ではないかも知れません。

痛手ですが、教会は村人に支えられています。でも、村人たちは羊を失うと ……

神父様は、急いで出かける用意をします。教会の羊はともかく、神父様という羊飼いの仕事は羊たちを慰めること、つまり、羊を失った村人たちを慰めることです。決して、神に背く愚かな行為を犯さないように。

狼の襲来は、まったく予期しないことではなかったのです。狼は遅かれ早かれ襲ってくるものです。それに、ここ数週間の間、羊の世話をまかされている身寄りの無い少年が、「警報」を送ってくることが何回かあったのです。

警報を受けると、銃を先頭に屈強な村人が駆けつけます。警報は狼が遠くに見えた時点で発報されるので、しかも、狼の群れはいきなり襲ってくるのではなく何匹かが、偵察なのでしょうか、先に現れるので、たいていの場合、羊に犠牲を出す前に、近づいてくる狼を威嚇して撃退することができるのです。「発報」だとか「偵察」だとか、偉く構えた物言いですが、軍隊から帰ってきた村人（酒場の主人です）が考え出したや

り方なので、なかなかうまく出来ています。

実際に、神父様がこの教会に来てすぐの頃ですが、その時はうまく行きました。その夜の「打ち上げ」は本当に楽しい思い出です。ビールを片手に歌う村人たちに代わる代わる頭をワシャワシャされて、未成年なのに飲んだくれて、羊飼いの少年はもう無茶苦茶でした。その羊飼いの少年は、今では立派な村人の一人となり（つまり出世したのです）、一挺しかない銃を預けられています。

それに比べて、今の羊飼いの少年は、ちょっと頼りないところがあります。悪いことに、あまり好かれる性格ではないようです。神父様から見れば、かわいい子羊なのですが。村人は、度重なる「誤報」に嫌気がさしていたのでしょう。そして、発報を無視してしまったのでしょう。そうでなければ、こんな慌て方はしないはずです。

おそらく、羊は間に合わないでしょう。かなりの犠牲が出ているはずです。せめて、羊飼いの少年が無事で居てくれたら。神父様は、急に慌て始めました。神父様の格好には全く似合わないのですが、村人の後を追って駆けて行きます。

神父様の見た光景は、覚悟していたとは言え、無惨なものでした。引きずって行けなかった食べかけの羊が、方々に転がっています。狼も何匹か倒れているのですが、村人はそんなものには目をくれず、羊の死骸に縋りついて泣いています。

その時、神父様は、何かを取り囲んで泣きながら棒で殴りつけている一団に気づきました。

狼であってくれ！

けれども、神父様の怖れていた「最悪」は、やはり必然だったのです。村人たちは、もうとっくに死んでいる、羊飼いの少年だった赤い固まりを殴りつけています。

神父様が近づくと、さすがに村人たちは、手に取った棒を所在なげにだらりと下げて、決まり悪そうに立ちすくみます。神父様は、なにも言いません。

「こ、こいつが いい加減なことをするから俺たちの羊が」

神父様は、分かっているのです。静かに諭します。

「まだ、ほんの子供だ。それに、まだ慣れていなかったはずだ」

このようなときには、神父様の控えめな叱責も、良い結果を産まないようです。

「こいつは、こういう奴なんだ！」

「そうだ！嫌な奴だ」

「わざとだ！俺たちが慌てて走ってくるのを面白がっていたんだ」

こうなると、手が付けられません。おそらく、自分でも何を言っているのか分からなくなっているのでしょう。口々に喚く村人たちの言うことは、どんどん支離滅裂になっていきます。

「わざとだ！」

「わざとやったんだ！」

「悪魔だ」

「ルシファーだ」

「ユダみたいに金貰ったんだ」

「セイヤクガイシャから金貰ってたんだ」

いや、まったく、せめて時代背景にそぐわない発言は遠慮してくれば良さそうなものですが、村人たちはそんなことも分からないほどの精神状態だったのです。

さすがに神父様に手を上げる者はいないはずですが（そういう時代です）、まともな説得は、もう無理なようです。兎に角、このかわいそうな少年の亡骸を、教会の墓地に埋葬してやらないと。御手は既にこの亡骸に置かれているとしても、祈りの場所に、村人も含めての祈りの場所に、葬ってやりたかったのです。

神父さんは、しばらく黙っていることにしました。支離滅裂な発言に気づかせる短い沈黙の時間。これで、少しは落ち着きが戻ってくるはずです。そう、その時代には、神父さんの装束の威力は絶大だったのです。

そして、その一瞬の落ち着きを壊さないように、慎重に。

「確かに、いたずらでやったのかも知れない。だがなあ、こんな小さな子供だ。己の犯した罪のもたらす結果に気づかず、やってしまったことだ。気持ちは分かる。気持ちは分かるのだが、埋葬させてくれ。私が運ぶから」

神父様は、「キリストの羊飼いの装束」が血で染まることにも構わず、少年を背負おうとします。そんなことをさせるわけには行きません。村人たちで、少年の着ていた上着をハンモックのように使って、さっきまで羊飼いの少年だったこの哀れな残骸を運んでやることにしました。

こうして、神父様公認の下、「狼少年」という寓話が誕生したのです。

第2章 レディーゴディバ

ここで言う「ゴディバ」は、ベルギーのチョコレートではありません。イギリスの伯爵夫人ゴディバさんのことです。彼女は、かの暴虐のレオフリック伯爵、彼女の夫であり重税により領民を苦しめ、慈悲深き彼女の度重なる願いを断固として拒絶する暴虐の夫から免税を勝ち取るために、馬に乗ってヌードで町を一周したのです。言わば、tax-free Lady なのです（うん、ちょっと違うな）。

ヌードで一周すると税金が安くなる（免税でなく減税でした）というのは、経済学にそぐわない話なのですが、これは、夫が「どうせできっこない」と思って提示した御無体な条件の結末なのです。つまり、伯爵様は、ど根所試しの賭けに負けたのです。

それでは領民は、減税と「高貴なお方のヌード」の両方を享受したのかと言うと、そうではなく、

家に閉じこもって慈悲深きゴディバ様のお姿を見ないという、
限りなく我慢強い行動を取った

とされています。ただし、トムという名前のひとりの男を除いて。このトムさんは節穴から外を覗き、その罰当たりな行為により視力を失い、そして「ピーピングトム」という称号を後世に残した……というお話です。

けれども、世の中にそんなうまい話はないものです。レオフリック伯爵は、領民には暴虐であっても、ゴディバにぞっこんであり、そして彼女の性格をまことに良く理解していたのです。彼女はとても恥ずかしがり屋で、絶対にそんな大胆なまねは出来ないのです。

これは、彼女の羞恥心と彼女が領民を思う心を比較してどうのこうの、という話ではなく、息を止めて死んでみろと言われても出来ないのと同じで、そんな恥ずかしい行動は、彼女には無理だったのです。

そんな恥ずかしがり屋のゴディバさんですが、それでも、馬小屋に降りてきて、これからそれに乗ってヌードで町を一周することになる馬さんを見上げて、そして彼女の服を脱がすために侍女がカートの紐をほどき始めたその時までは、断固としてやり遂げる決心で燃えていたのです。それなのに、ゴディバさんは思わず侍女の手を払いのけ、顔を覆ってしまいます。

その時、レオフリック伯爵は城の壁裏に隠された秘密の通路を使って、のぞき穴からゴディバさんの様子を見ていました。彼女が、侍女の手を払い退けては再び脱がせるように命じ、また払い退けては真っ赤になって顔を覆い、と繰り返す姿を覗いて興奮しています。伯爵は、そんな彼女が大好きで、可愛くてたまらないのですが……議論の余地なく困った人です。

ただし、伯爵のために少し弁護すると、伯爵は既に、勝負の結果などには関わらず、彼女の願いを叶えてやる決心をしていたのです。そして、その準備を部下に命じていました。もう少し、彼女の可愛い右往左往を堪能してから、あきれた顔で姿を現し寛大にも願いを叶えてやり、その当然の帰結として「レオフリックさま！だーいすき！」と飛びついてくるさまを想像して、それはもう、顔はニヤニヤして気持ち悪い奴です。幸いにも、秘密の通路なので誰にも見られていませんが。

その時、服を脱がそうとしては払いのけられ、また脱がそうとしては払いのけられと、ご主人様に同情することはこの上ないのですが同時に少々イライラしてきた侍女Aとは別の侍女Bが、とんでもないプランを思い付いたのです。侍女Bは、ゴディバ様お気に入りの見習い少年騎士を連れてきます。そして、今で言うところのプラカードをいくつか用意して、それから少年騎士の服を脱がして、そしてゴディバさまは着衣のまま、お出かけに取りかかりました。

領民たちは、万ーゴディバ様が本当にヌードで登場なさったときに備えて、それぞれの家に閉じこもっていたのですが、外の気配は様子が違います。ゴディバ様のヌードをまともに見てしまわないように慎重にですが、外を見るとゴディバ様は、いつもの質素で上品な服を着ていらっしゃるようです。領民たちは、安心して往来に出てきます。

先頭は、少年騎士がヌードで馬に乗り（ヌードなのに騎士だとわかるのは不思議に思うかも知れませんが、戦闘用の大柄な馬に乗るのは騎士

階級と決まっているのです)，そして，

わたしは全裸

と書かれたプラカードを高々と掲げています。

その後ろには，貴婦人用の上品なお馬さんに乗った着衣のゴディバさまが続き，やはりプラカードを，

MeToo！

と書かれたプラカードを掲げています。

まず，察しの良い領民のひとりが設定を理解し，

「ゴディバ様は裸だ！」

と叫びます。奇妙な光景に驚いていた領民たちも，だんだんと分かってきます。領民は皆，

「ゴディバ様は裸だ！」

とか

「伯爵婦人は裸だ！」

とか叫んでいます。

「わしらが税金で死んじまわないように，ゴディバ様が！」

「わしらのために，こんな恥ずかしいことを堪えていらっしゃる！」

もう，これは悪乗りです。ビールを持ち出す奴まで出てきます。

こうなると，悪乗りは留まる場所を知りません。女達は，

ゴディバ様だけ恥ずかしい思いはさせない！

ということなのでしょうが，乙女も婆さんもぞろぞろと行列を作り（念のためですが服は脱いでいません），それぞれ，そこらの看板の裏やシートなど，つまりプラカード状の物体に

MeToo！

と書いて、掲げて行進しています。実に楽しそうです。伯爵夫人も、嬉しそうにニコニコしています。

城では、秘密の通路から抜け出してきた伯爵が、屋上であきれ果てています。せっかくの計画はパーになってしまいました。まあ、こうなったら、いかにも「負けた」という顔でもして、しぶしぶ要求に応じてやるしかありません。

こうして、みんなが幸せになって話が終わりそうなものなのですが、まことに残念なことに、やはり犠牲者も出てしまったのです。

ケンタルスという名の少年がいました。彼は、この計略を思い付いた侍女Bに匹敵するほどの頭脳の持ち主でした。それなのに、いわゆる「空気の読めない奴」だったのです。

「みんな、何を言っているの？」

「ゴディバ様は服を着ているよ！」

こんな声が御領主様に聞こえてしまったら、と言うか、せっかくの

MeToo! 運動

に水を差されてしまったら、減税デモの圧力は削がれてしまいます。なんとか黙らせようとします。

「ケンタロー！ ゴディバ様は裸なんだ！」

(ケンタルスがケンタローに変わっていますが、いい加減な俗ラテン語なので、気にしないことにしましょう)。

カーニバルでもなんでも、ご陽気な祭りの路地裏には、暴力が潜んでいます。ケンタルス君は、既に危険な状況に置かれているのですが、空気を読めないケンタルス君は止めません。そして、最悪の言葉を使ってしまう：

「この目で見ればわかる！ ゴディバ様は服を着ている！」

そして、ケンタルス君は、反省した町の人たちに助けられながらとは言うものの、視力を失った生涯を送ることになってしまったのです。

第3章 裸（？）の王様

3.1 まあ、普通のストーリー

その国の王様は、お世辞にも賢いとは言えないお方で、絵本の挿絵でよく見られる「ちょっと太めと言うよりは太ったと言うべきボディー」のお方でした。つまり、普通の設定で始まります。

念のためにお断りしておきますが、「賢いとは言えない」ということと、「太った」ということの関連を主張するつもりは、毛頭ありません。描写をするのも面倒なので、

よくあるお話から設定を流用してね

とお願いしているだけです。

「お世辞にも賢いとは言えない」という表現は、ちょっとまずかったかも知れませんが、当然のことながら、王様の臣下は皆、「王様は賢い」とお世辞を言っていたわけですから。まあ、この辺りは「言えない」の主体の問題ですが、そんな理屈っぽい話にはしたくないので、先に進みましょう。

普通の設定のとおり、異国の商人遠方より来たりて衣服を提示し……いや、この場合は衣服を提示することなしに「衣服を提示している」と言うわけです；

「賢明なる王様、このいとゴージャスにして華麗なるお洋服を御覧下さい！」

王様は、「この商人は何を言っているのか」と不思議に思いましたが、臣下の目もあります。穏やかにこの怪しげな商人に尋ねます；

「そちは何も持っていないではないか。」

商人はいかにもびっくりしたという顔で、だがちょっと間を置いてから少し声を潜めて

「これは愚者には見えない服なのです。いや、お待ち下さい！お怒りにならずに。」

「賢明なる王様にも今のところ見えないのには、理由があるのです。およそ、人の認識というものは周囲との同調を引きずるのであって、このように大勢の臣下が控えている場では、賢明なる王様と雖も、目が曇るものなのです。」

「どうぞ、そちらの間に移って賢明なること比類無き王様だけに見ていただきたく。」

王様は、商人と二人っきりになったのですが、当然ながら、衣服らしきものは見えてきません。それなのに、「いとゴージャスにして華麗なるお洋服が見えてきたでしょ？」と見せびらかす商人の演技は、それはそれは見事なもので、そして、囁きかけます：

「うっすらと見えてきたでしょ。愚者には見えないこの服が。」

だが、王様は意外に正直なのです。

「見えん」

商人は粘り強く囁き、王様は意外に抵抗します。

「だいじょうぶです。すぐに見えてきます。賢明この上なき王様ですから。」

「お前は、暗示にかけようとしているか！ 怪しからん」

「いいえ、賢きことこの上なき王様。並の賢い人間ならば、賢い人間は暗示にかかりやすい、と暗示するだけで暗示にかかるものです。だが王様の如き賢きことこの上なき賢きお方は、如何なる手段によっても暗示になどかからぬものなのです。暗示など、とんでもない。暗示など無意味です。暗示ではありません。暗示など、絶対に、絶対にかけようがないのです。大丈夫ですよ。賢きことこの上なき王様。もう、うっすらと見えてきたでしょ？」

王様は気づいていないのですが、実は、王様は気の毒な境遇に置かれているのです。臣下のものたちは、「王様は賢い」と口々に褒め称えるのに、

王様が「このようにはからえ」と命じると、御命令を直接賜った家臣は敬服の至りとばかりに「いと賢明なるご判断」を褒め称えるのに、どこでそうなったのか、それは全く違う形に変わって実行されるのです。そんなことばかりなので、御自分でも気づいてはいないのですが、王様は判断というものに全く自信を持てなくなってしまったのです。結局はそうなるのだから、家臣の考えを察して自分の考えのように受け入れてしまわないと、世の中が理解不能なものになってしまうのです。まことに、お気の毒でございます。

なんだか、服のようなものが見えているような気がしてきます。

「うむ、少し見えてきたぞ。」

まあ、そんなところで、ここからも色々とやり取りがあるのですが、それは商人にまかせて、先に進みましょう。

「こ、これも脱ぐのか？」

「大丈夫ですよ。何もしないから…… じゃなかった、いと賢明なる王様、こちらの、決して蒸れることなき下着、その肌触りは春の午睡の頬をなぜるそよ風のように、この空気の如き肌触りの下着こそ王様に相応しく。どうぞ、これにお着替え下さい。」

男が二人っきりで密室に籠もり、怪しげにゴニョゴニョと囁き合いながら、なんとか、お着替えを終えました。いや、お着替えと言って良いのだからどうか。脱いだことは確かなのですが。

「それでは王様！ 御臣下の方々にお披露目を！」

「まて、待つのだ！ ちょっと、待て！」

王様は慌てています。なにしろ、自分には服は見えないのですから。

「ちょっと待つのだ。愚か者には見えないのだな。それでは、裸身を、愚か者には王の裸身を曝すことになるではないか。」

ここが勝負の分かれ目です。商人の行動は迅速です。

「偉大なる王、賢きことこの上なき王様の大海の如き精神の奔流は、愚者の心に浮かぶ愚か故の映像を瞬時に洗い流し、愚者と雖もこのいとゴージャスにして威厳溢れるお召し物を賞賛するであらう。さあ！」

商人は、王様の言葉を待たず、一気に扉を開け放し、パンツすら履いていない王様は、その玉体を臣下一同にご披露するはめになりました。

「さあ、御覧下さい！いと賢明なる王様の、いとゴージャスなるお召し物を！」

しかし、王様も気の毒ですが、家臣も気の毒なのです。王様がなにを言っても、その場ではその「お言葉」を（取りあえず）受け入れておく、という長年うまく行ってきたやり方に染まっていたため、初動でミスってしまったのです。

「ご立派なお姿！ 見事なお召し物！」

商人は褒美を受け取り、そして後の展開は、伝えられている物語そのままです。省略しましょう。

3.2 賢い王様

その王様は、本物の賢者でした。その賢さは、他の人たちと比べてすごく賢い、などというものではなく、何と言うべきか……とにかく賢かったのです。

賢王が治める王国ですから、領民は賢王を称え王国は平和そのものでした。けれども、王様は寂しかったのです。

「一人だけでも良い。普通に話せる相手が欲しい。」

なにしろ王様はとてつもなく賢かったので、誰と話すにしても相手の言うことは予め予想できてしまい、また、相手の愚かな間違い（王様のようなスーパー賢者から見れば愚かな、ということです）にも気づくのですが、だからこそ傷つけないように目一杯配慮しながら、「会話」というものをしなければならなかったのです。

王様を称える臣下はいても、王様にとっての話し相手になってくれる者は、いないのです。王様の話し相手のつもりの家臣ならいるのですが、それはその家臣がそう思っているだけで、王様にとっては、「王様の話し相手」の話し相手になることも、仕事のひとつだったのです。まことに、お気の毒です。

王様が次第に不良化していったのも、やむを得ぬ事なのでしょう。

王様は、妙な「研究」に没頭しました。「研究」と言いましたが、今で言うところの自然科学的な研究とは雰囲気違います。当時、物質の世界については今ほど知られていなかったので、物質の世界の原理を物質の世界の中に求めるのではなく、物質の世界の原理を精神世界の原理の反映として追求する、というやり方が主流だったのです。王様は、「ものが見える」ということの根源を、「もの」と「目」に求めるのではなく、「ものが見える」ときの心に求め、ひたすら心の研究をしたのです。そして、

賢者にしか見えない布

という困った発明をしてしまいました。全く、ろくでもない発明をしたものです。

さて、これをどのように使ったら良いのでしょうか。この布を見せて、「見える」と言う人を探せば、今まで探し求めた「本当の話し相手」に出会えるかも知れません。だが、臣下や領民というものは、ご主人様の感情には敏感なものです。おそらく、こんな試験みたいなやり方では、多くの人を傷つけてしまうでしょう。

王様は、この布で服（もちろん下着も）を作り、それを着て歩き回るという暴挙に出ました。不良化が、突沸したのでしょう。

臣下と領民のほとんどを占める（もしかすると、全部かも知れません）「愚か者」に御自身のヌードを披露することになるのは必然です。そして王様は賢者であっても、人に自慢できるようなご立派なお身体の持ち主ではなかったのですから、

お身体を、つまり全体としての身体を、もしくは、なんらかのパーツを見せびらかしたかったのだろう

などと考えるはいけません。もっとも、「見せびらかす」という変態行為と「ご立派な」との相関は無い、という有識者の見解もあるのですが。

兎に角、この王様に限って言えば、見せびらかしたかったのではありません。

王様にとって、恥ずかしくて、みっともなく、滑稽な行為であることは百も承知なのに、それでも、やってしまったのです。それは、「話し相手が欲しい」と「恥ずかしい」を比較した結果なのでしょうか。おそらく、そうではありません。あまりにも「良い子」を続けてきた王様は、不良化して自爆行為に出たのでしょう。王様自身がどのように思おうと、そして賢者であろうと無かろうと、これは典型的な自暴自棄の自爆行為です。

端から見れば、自棄になったの自爆なのですが、「裸の王様」（本当は服を着ているのに）からきまり悪そうに目を背けて、「立派なお洋服でございます」と蚊の鳴くような声で言う領民の中を歩き回り、王様は悲しかったのです。誰も、服を着ていることに気づかないのですから。そして

「王様は裸だ！」

と叫ぶ少年の声。ほっとします。王様は悲しかったのですが、それでも、偽りの褒め言葉を聞き続けるよりはましです。ようやく、みんなも；

「王様は裸だ！」

「王様は裸だ！」

もはや賢王ではなく「変な人」。

後は自然な成り行きに従って、王様は国を捨てて隠者になることができたのです。

3.3 不良商人

王様は隠者になりました。しかし、いきなり隠者になっても孤高に満足できるものではなく、話し相手が欲しいという気持ちは、日に日に強くなっていきます。そして、やけな行為をしてしまうと、不良化は急速に進んで行くものです。

他者の気持ちを傷つけまいと、あれほど配慮して生きてきた元賢王も、王という仕事から解放されるのと一緒に、他者への配慮も捨ててしまったのです。

元賢王は、隠者を止めて怪しげな商人になり……最初の話に続きます。

さて、愚かな王様に「いとゴージャスなお召し物」を売りつけたこの商人は、報酬を受け取ると宿に帰って身なりを変え（つまり捕まらないように変装して）成り行きを見届けました。そして、次の王国に向かう旅の途中で、遠くに見える城を振り返って、寂しそうに言いました。

ここにも賢者はいなかったか。何時になったら。

そうすると、最初の話も「裸の王様」と言い切れるものやら。

蛇足 けっこう綺麗に終わらした（つもり）なのに、蛇足を：

ある王国に、賢い少年がいました。ある日、少年は、なんとも不可解な出来事に遭遇したのです。

まず、王様が見たこともないようなゴージャスな服を纏って、市場に現れます。周りの人たちは、王様の服を褒め称えています。ところが、ひとりの子供が突然、「王様は裸だ！」と言い始めたのです。なぜ、そんなことを言ったのかは、分かりません。もしかしたら、なにか比喩的な意味で言ったのかも知れませんが、そんなややっこしいことを言う歳とは思えません。さらに不思議なことに、周りの大人たちも、「王様は裸だ！」と言い出したのです。全く、不可解です。

少年は、大人になるまでずっと、この出来事について考え続けました。ややっこしいストーリーをいくつもいくつも、考えたのです。そして作家となり、「裸の王様」というお話を残したのです。

この元少年は賢かったのです、お話を作るときに気をつけたことはひとつだけ：

後々までずっと残るお話は、単純でなければダメ。

そうです！賢かったのです。大体、ああでもない、こうでもないと散々ややっこしい展開を図るストーリーは、ものごとをややっこしくしたいだけの人の、賢さからは遠い自己満足に過ぎないのです。いわんや「蛇足」などを付けたくなるストーリーは、要するに

単純な「お話」があってこそのお話

の蛇足なのであって、この部分が蛇足なのではなく、蛇足がついている
ようなこの話そのものが、蛇足も含めて蛇足なのです。

第4章 鏡映の犬，肉を放す

お犬は，辛抱強く待ち続けました。早くご主人さまに纏い付いて身体中ワシャワシャして貰いたいのですが，待ち続けます。お仕事中的ご主人さまは，邪魔をされるのがとてもお嫌いなのです。

「伯爵様」と呼ばれるこのご主人さまは，いつもはコチャコチャと字を書いているのですが，今日はなんかお考えらしく，じっとしていると思うといきなり右手を挙げて，うなずくと手を下ろして考え始め，しばらくじっとしていて，また手を上に伸ばしと繰り返しています。ご主人様が手を挙げるたびに，お犬は遊んでもらえるのかと尻尾を振るのですが，そうではないようです。もう，灯りのない書斎は暗くなってきたのに，相変わらずこの繰り返しです。

伯爵様は，ロシアにたくさんいる伯爵というだけでなく，トルストイという結構名の通った作家で，そのとき「自由意志」というやつについての考察をなさっていたのです。何年か経ってからのことなのですが，伯爵様はその考察を論文のような形にまとめました。それならそれで，結構なことではございます。それなのに，何を間違えたのかその草稿を，普段からしつこく伯爵邸に出入りしているピュートル・ニコラーエヴィチ・シンシンという名の嫌な奴に見せてしまったのです。シンシンは一読して，

まあ，チラシの裏になら，十分に書き留めておく値打ちがあると言えましょう

などと，慇懃にして冷淡極まりない評を浴びせかけました。

当時のロシアには「チラシ」という名の物体は存在しなかったもので，伯爵様は何を言われたのか分からなかったのですが，シンシンの嫌らしいまでに素っ気ない表情は，伯爵様から，この草稿を論文としてまとめる意欲を根こそぎ刈り取ってしまったのでしょう。

「チラシ」という謎の単語が伯爵様を混乱させ，そして，ナポレオン嫌いが混乱に拍車をかけ，なんと言うことでしょうか，「戦争と平和」という

名作の最後にこの論考を付け加えるという、とんでもない暴挙に至ってしまったのです。これはまことに残念なことであります。

さて、お犬が退屈している書斎に戻りましょう。お犬の辛抱は限界に達しました。そっと伯爵さまの足下に近づき、控えめに鼻の頭をこすりつけます。

「過去を原因として決まる現在の行為」と「自由意志」の関係などというものを一心不乱に考えているにも関わらず、このレベルのお人ともなると、「将来を原因として決まる現在の行為」などというものもあるらしく、伯爵さまはお犬が邪魔してもお怒りになりませんでした。

それでは、どのような「将来を原因として」なのかと言うと、このお犬は、ずっと後のことですが、シンシンがうっかり尻尾を踏んづけた機会を逃さず、立派な歯形が残るくらい思いっきり噛みつくというお手柄をたてたのです。

なお、「お手柄をたてたのです」であって、「お手柄をたてるのです」でない点は大切です。「将来を原因として決まる」ということは、「未来予知」でも「運命論」でもないのです。

このお手柄の作用により伯爵様はお怒りにならなかったのですが、仕事を中断する気はありません。執事のヘルマン・ホートさんと呼んで、小間使いにお肉を持って来させるよう命じます。そして、小間使いのイスース・ホート・タタライスカヤさんが持ってきた立派なお肉を、お犬に与えます。

「良い子だから、これを持って外で遊んでおいで。」

お犬はお肉をくわえて、喜んで走って行きます。書斎から出ると、まだ外は明るく、肉汁は口の中にジワジワっと染み出してきます。幸せのお犬は川の方に走っていきます。

嫌な予感がしますね。お犬は橋の上で水面に映った己の映像に吠えて、お肉を落としてしまうのでしょうか。

残念なことですが、現象としてならば、「お犬は肉を落とす」という結果は変わりません。御存知のように、肉をくわえた犬が橋の上から水面を見下ろすと、肉を落とすことに決まっているのですから。でも、このお犬は、それでも幸せいっぱいご主人さまの書斎に戻って行ったのです。それは、このような経緯です：

お犬はお肉をくわえて幸せいっぱい走っているのですが、頭の片隅には、と言うか尻尾の先っぽには、「ご主人様はなにをなさっていたのだろう」という気がかりが引っかかっていたのです。ご主人さまが考え込むのはいつものことですが、ひとりで右手を挙げたり下ろしたりしてみても、何が分かるのでしょうか。何も分からないことくらい、お犬でも分かります。ちょっと心配です。

でも、きっと、ご主人さまは何も分からないことをご承知でやってみてるんだ。何度も何度も。立派なご主人さま！

お犬の尻尾は、元気よく振られています。

お犬は、自由意志により川に走って行き（正確に言えば、特に考えることなしにという自由意志により）、川にかかる橋から水面を見下ろします。これは「お話」というものにおける必然ですね。

下からは、肉をくわえた鏡映の犬がこちらを見えています。

不思議なことです、イエイヌは飼い主に似てくるのです。お犬は考え始めました；

あの犬に吠えろと、肉を落とすなあ。

吠えろと口を開けるのだから、当たり前だな。だから、吠えない。吠えるはずがない。肉をくわえてるのに口を開くのはアホ犬だ。

口を開けると（開けるもんか）肉は落ちる。口を開けると、あの犬も口を開ける。あの犬も肉を落とす（上にだけど）。

口を開けると、その結果、あの犬も口を開ける。

でも同時に？

口を開けた結果、あの犬が口を開けるのに、それなのに同時？

それならば、もしもあの犬が口を開けたなら、それが原因で口を開けて肉を落とすはめになる？

そんなバカな！

そうです。そんなバカな、で済む話です。けれども、お犬はご主人さまが大好きなのです。

口を開けるか開けないかは、もちろん、選べる。うん、選べる。やってみないけど。「口を開けない」は、もう選んでいるんだから、「口を開ける」を選ばないだけだけど。

選ばないけど、口を開けるは選べる。でも、知りたいのはそんなことじゃない。あの犬が口を開けたら、口を開けて肉を落とすなんて嫌なのに、口を開けることになるのだろうか。知りたいなあ。

でも、あの犬は口を開けない。だから知ることは出来ない。やってみれるのは、口を開けてみることだけか（やらないけど）。

けれども、ご主人さまは、何度も右手を挙げてみてたなあ。

ご主人さま！だーいすき！

お犬は口を開けました。上等のお肉は落ちていきます。

水面はしばらくの間バチャバチャしていましたが、やがてさざ波も滑らかになり、(肉をくわえていない) 犬の姿を映しています。そして、お肉は、鏡映の犬の横に沈んでいます。

お犬は肩越しに振り返り、お犬の後ろにお肉がないことを確かめます。それから大喜びで叫びました（つまり、吠えました）

お肉は落ちてあそこに在るけど、あの犬の肉は消えた。これが結果なのだから、そしてあの犬は結果を作れないのだから、自分で口を開くことなんかできないに決まってる！

何と言うか、何と言ったら良いのかと言うしかないのですが、お犬は、この「考察」を早くご主人さまに報告したくてたまりません。すごい勢いで走って行き、ご主人さまの書斎へと突進します。

ちょうどその時、伯爵さまはお仕事を終えてご休憩モードに入った所でした。「考察」を嬉しそうに報告するお犬（つまり、ワンワン吠えて飛びついてくるお犬）の首根っこを両手で抱えて押し倒すと、このふたりは誰も見ていないことを良いことに、思う存分イチャイチャしたのでした。まことに幸せなふたりでございます。